

ができるが、その比定地にあたる高松市で発掘調査が続けられ、既に4冊の報告書（高松市教育委員会、1987・1988・1989・1990）が刊行されている。その他では、鶴庄絵図の比定地にあたる太子町でも一部発掘を伴った詳細な報告書（1988・1989）が2冊刊行されていて大変注目されるだけに、鶴庄に関する従来の論文などとあわせて読むと、より深い理解ができるのではないだろうか。さらに土佐国でふれてある城館も、中世城館跡（南国市教育委員会、1985）を参照すれば、参考になる点は多いと思われる。なお、『埋蔵文化財ニュース51（1985）』には、全国の城館址発掘調査・分布調査報告書一覧があり、便利である。

以上、若干の発掘報告書を取り上げたが、まだよりよい報告書があるかもしれない。要は、各章にある論文・単行本に関連する発掘報告書があるか否か、つねに気を配ることであろう。

ささいな事であるが、第10章では文中にシレジア、地図中にシュレジェンとあるが、かつてドイツ領、現在ポーランド領であるので、文中にはポーランド語のシロンスク（英語ではシレジア、またはドイツ語でシュレジェン）と表記したほうがよいのではないだろうか。ドナウ川・ダニューブ川の2通りの表記があるが、前者に統一すべきであらう。

第9章にイースト（1950）のローマンロードの地図が記載されているが、既に40年を経過し、その間にローマンロードの研究も進んでいるので、できるだけ新しい地図を入れるべきであらう。ヘルマン・シュライバー（1988）の『Auf Römerstraßen durch Europa』の口絵などは最適ではないだろうか。なお、この本は『古代ローマへの道』（河出書房新社、1989）として訳本がでているが、地図は大幅に削られ口絵もカットされている。この口絵とイーストのそれを比較しても、かなり相違点がみられる。

以上、若干コメントしたが、多岐にわたる歴史地理学の内容をコンパクトに要約されたことに敬意を払いたい。文章を読んでいて、注および参考文献以外の論文を多数読んでおられることをたびたび感じた。力量不足で的是はずれの書評になり、著者4人には申し訳なく御海容を願う次第である。

（日野尚志）

森栗 茂一 著

『河原町の民俗地理論』

弘文堂 1990年7月

A5判 309ページ 5,800円

変化の少ない常民の村落文化を前提に成立した民俗学は、加速度的に変わりつつある現代の生活文化に直面して、その対象・方法ともに新しい方向を求めて混沌の時代にあるといわれる。この現状の打開をめざし、様々な検討がなされているが、若手研究者を中心に進められている取り組み、例えば、消えゆく民俗に代えて現代社会で進行しつつある民俗現象を扱い、研究者自身の生活のなかから主観主義的にとらえる研究方向などもその一つといってよい。

本書は、このような新しい民俗学の方角の可能性を探ろうとする著者が、都市形成の原点を河川敷にできた河原町に求め、村落に足をふまえた従来の民俗学に対する都市の民俗学の確立をめざした試みである。これを「民俗地理論」と呼んだのは、著者の言によれば、民俗現象を地理の方向性によってとらえる視点に基づくものであるという。もっとも、民俗現象を地理学的に扱うというよりも、地理的事象を民俗学の立場からみるほうに力点があるようにも思えるが、民俗と地理との接点を求めようとする著者の考え方が書名に表われているといえる。内容の概略と、各章での著者の主張の要点を紹介しよう。

序章の役割を兼ねた「はしがき」では、文化変容の著しい現代は民俗学の存亡をかけた危機の時代であるとし、今要求されている新しい流れのうち都市民俗学に関しては、歴史都市のトポグラフィや現代都市民俗を述べる前に、都市の形成史を論じることの重要性を指摘する。その上で、本書を、「ハレ・ケ・ケガレ」理論と社会史の成果に基づいて、河原という「場」の問題から都市の形成に接近しようとした著書であると位置づけている。

第1章「都市形成と現代民俗」では、産業化と情報化の波のなかで岐路に立つ民俗学の現況を改めて概観し、その主体性の確立を都市民俗のなかでとらえるという方法論的立場が述べられる。本書のねらいとする都市形成史に関しては、用語の検討を時代を追って行い、古代以来の農業集落であるムラ、中世以降ムラの漸移境界におこった非農業集住のイチ、政治的意図を含む集住空間のミヤコ、集落内の町場空間とミヤコ・イチを含めてマチと定義する。さらに、近代都市形成のモノグラフとして、神戸に集ま

る人々の主観主義によるメンタルマップを描き、その近代都市の極限としての現代の民俗への視角をスケッチ風にまとめている。

第2章「川とムラ・川とマチ」では、まず近江盆地の山の神信仰を通して、山と川、ムラの関係を述べ、次いで、川とマチ、トジとのかかわりについて、備後国府、江戸、京都、神戸などの事例をもとに整理している。人間と川との関係を歴史時代の都市化のなかで考えるものといえるが、その結果、マチが、さらに多元的機能をもつツムも、場所のもつ境界性の故に、洪水の危険をはらみながらも、無住の空間である河原に立地して形成されたと主張する。

第3章「河川史と河原のマチ」では、まず、日本の近世都市の地形条件とその機能を、一覧表を作成してマクロに考察する。その上に立って、治水工事によって生じた河原（ここでは人の住居に適さない湿潤または臨時的出水の荒地として広義に用いている）にマチができたことと述べ、そこが近世の経済発展とともに飛躍的な成長をとげたことについて、利根川流域を中心に例証している。さらに、瓦町と表記されるマチのなかに、河原町が少なくないことを指摘している。

第4章「河原町一覧」では、『角川日本地名大辞典』（角川書店）、『日本歴史地名大系』（平凡社）をもとに、著者の調査を加えて全国河原町一覧表を作成し、そのうちのいくつかについてマチの形成史を概観している。一覧表には、形成時期、関連河川、機能、職人、信仰（民間信仰）、遊郭や墓地の有無等をまとめており、資料としての活用をはかる意図がうかがえる。

第5章「民俗原理の形成史——ハレ・ケ・ケガレ論の再検討をとおして——」では、日本民俗学の主要原理であるハレとケ、三項相関論などとして議論されるケガレ、さらにハライやキヨメなどに検討を加える。著者の見解の要点は、民俗においては、基本的にはハレとケの循環が存在すること、ケガレはケからハレ方向へのエネルギーであり、キヨメはハレからケ方向へのエネルギーと考えられることとまとめられよう。

このような検討の上に立って著者は、本来はエネルギーのベクトルにすぎないケガレが身分や状態概念となるのは、被差別身分のつくられる中世においてであったとし、それが近世の身分制に受け継がれて固定化され、地域的にも河原の町として定着して

いったと述べる。ハレ性を帯びた「場」である都市の形成史からいえば、ケガレの人々がハレのマチ場をつくったのであるから、ハレとケの民俗原理を明確にする必要性は、本書の中心課題の一つであったものと思われる。

第6章「河原マチの諸相」では、河原町に住む人人や職業などの時代による変容の状況を、職人、芸能、民間信仰、宿と遊女、茶屋について述べている。いずれも、公界性という河原町の「場」の特性によって住み、また位置したものであるとするのが著者の結論である。

第7章「墓場と盛り場」では、全国の河原町のなかで墓地から展開した例をあげたあと、とくに近世大阪の墓場と現代大阪の盛り場のかかわりを述べる。その上で、墓は死霊の集まる賑やかな所という心性こそが、墓場の盛り場化という都市形成史の要因ではなかったかと指摘している。

以上が本書の概略と著者の主張の要点である。多彩な記述展開をみせる各章の内容からみてやや心もとない紹介ではあるが、民俗と地理の結合をはかろうとする著者のねらいが学際的な成果として結実していることを、いささかでも理解していただければ幸せである。以下、若干の私見を述べて評にかえたい。

都市の形成史は、立地条件や機能的側面、あるいは地域構造などから論じられることが多い。しかし、都市形成にかかわった人間の行動は、「場」の歴史的・社会的状況や経済的特性を眺めるだけでは推しはかれるものではない。そこに、人間を束にして括ってとらえようとしたことへの反省からくる近年の人間主義地理学の流れや、意識空間への接近があると考えられる。

都市、ことに現代都市へせまるにあたっては、それぞれ異なった顔をもち、違った基準のもとで判断する人間の行動にもどした上で、その全体像を探る方が求められているといえよう。この時必要なことは、人間の心底にある歴史的意識、あるいは民俗概念、卑近な表現が許されれば人間のくせにまで立ち入って考える態度である。その意味からいって、本書でいう「市民1人1人が都市とは何か、その生活とは何かと考えなおすことこそ必要な課題」との指摘は、都市形成史はもちろん、都市論全般への問題提起といわねばならない。

ムラとムラの漸移帯にマチがつくれ、ケの生活

を基本とするムラを離れてケがかれた人々がそこに住み、ケガレから逃れるためにハレを演出するという見解自体は、とくに目新しいものではない。だがしかし、ケガレの身分の人々が集まりハレが形成される場所として、河原町を具体的にとりあげ、「身分」と「場」との結合を考えていることに注目したい。さらに、都市の原理であるケガレとハレの表裏一体構造を具現する場所は、都市の拡張に伴い周辺の悪条件のところへ拡大すると民俗事象から都市構造へせまることも、アーバンフリンジの市街地化を経済的視点のみで眺める態度への反省を促すものである。

その他、主観主義による都市像と都市形成史、信仰と場所とのかかわり、盛り場とそこにあふれる若者の民俗など、示唆に富む事項は多いが、限られた紙数でそのすべてを述べることは難しい。そこで、印象的なことがらを最後にあげておく。

本書は、1975年から90年に至る著者の諸論文を修正しつつ、新たな論考を加え、河原町に焦点をあててまとめたものである。それだけに、マクロな視点

での検討とミクロな調査報告との整合性や、歴史的なマチ論と現代都市の地域論との関連性などに問題がないわけではない。しかし、漸移帯の重要性を論じ、そこに対する人々の心のあり方と「場」とを関係づけて考えようとする著者の問題意識と論調は、一貫して乱れるところがない。各章の文章のなかに著者の主張が色濃く出ているが、これとても問題意識が明確であることの表われといえる。

本書の評価については、民俗学プロパーの立場からはさまざまな見方もできるであろうが、地理学の立場、とくに歴史地理学の面からみた場合は、ややもすれば見落としがちな接近法、すなわち人間の心のあり方からのアプローチの重要性を教えてくれる好書と思われる。ことに、地域の永続性を考えるに際しては、地域変容をその中核をなす人間1人1人の心性や民俗性にまで立ち入って考察するという態度が、今後の地理学の方向からも重要なものではなかろうか。

(白石太良)